



もうすぐです！ぜひご来会ください

金沢景子モダンダンスステージⅢ

2007年12月16日(日) 6時開演 兵庫県民小劇場
「壁を通りぬけるもの」「風」「まわるたま」「紫のとき 藍のとき」

金沢景子モダンダンスステージⅢのリハーサルが大詰めです。どうぞご来会ください。金沢さんに作品について解説をかいていただきました。

「壁を通りぬけるもの」

人には、本来、愛したい愛されたいという気持ちがある。理解されたいのに理解されない、受け入れられたい受け入れられない、孤立するから守ろうとする。防衛本能が強くなると敵を生み出す。勝手に壁をつくってしまう。不安になる、恐怖心が芽生える。結果的に精神を病んだり、争いや、戦争、につながっていくのではないかと。人が壁を通りぬけられるのか、通りぬけられるとしたら何ものなのか、そもそも壁はあるのか。平和な世界に1歩でも近づきたいという願いを踊りにした。

「風」

15年前に父を亡くした時の体験がもととなっている。父は東京、私は神戸。離れて暮らしていた時は、淋しさは常にあったのだが、父が息を引き取った瞬間にその気持ちがなくなり、いつもそばにいてくれるという安心感に変わったのには、驚いた。「あー、風になったんだ！」と実感。新井満氏の『千の風になって』が聞こえてくる度、亡父からのメッセージのように思う。今でも私や家族を励まし、生かしてくれているんだと感謝している。それをもとに、1人の女性を愛してしまったが為に命を落とした男性と、残された女性の物語。

「まわるたま」

不整脈で苦しんでいたのが幸いし、横になって本を読んでいた時に出会った詩からできた。

『昼となく夜となく わたしの血管をながれる同じ命の流れが、世界をつらぬいてながれ、リズムカルに鼓動をうちながら 躍動している。その同じ命が 大地の塵のなかを駆けめぐり、無数の草の葉のなかに飲み込まれて萌え出で、木の葉や花々のざわめく波となってくだける。その同じ命が生と死の海の揺籠のなかで、潮の満ち干につれて ゆらけている。この命の世界に触れると わたしの手足は輝きわたるかに思われる。そして、いまこの刹那にも、幾世代の命の鼓動がわたしの血のなかに脈打っているというおもしろいから、わたしの誇りは湧きおこる。』(ラビンドラナート・タゴール)

「紫のとき 藍のとき」

- ・紫のとき 藍のとき この夕暮れを私に贈って
- ・紺のとき 黒のとき この闇に私をゆだねて
- ・紫のとき 白のとき この夜明けに私は立ち上がって

以上4作品、どうぞ会場までお運びいただきご覧下さいますようお願い申し上げます。

金沢景子

終わりました！ありがとうございました

第19回兵庫のまつり ふれあいの祭典 2007洋舞フェスティバル

11月3日(土) 神戸文化大ホール

「道」 構成・振付 藤田佳代 振付 泉ポール 太田由利 加藤きよ子 田中俊行

ふれあいの祭典 11月3日 終了いたしました。

大成功と書きたいところですが 残念ながら かじのり子 骨折 もうひとり 会の2日前に12針縫う大けが 2人とも足首のけががでどうしようもなく とにかく穴埋めのため朝10時から 練習また練習の繰り返しでした。出演者45人のおどりですが 2人ぬけるとやはりおおごとです。2回3回とくりかえしているうち 皆の気持ちが 収斂し なんだかすごいものになる予感がありました。集中力をきらさず どこまでやってくれるか 期待が膨らみました。そうなんです 踊りは とてもうまくいきました。お客さんも 満足そうでした。兵庫県洋舞家協会の先生達もうれしそうでした。でも わたしはやはり二人かけることなく みんなで踊りたかったなあ と 今も思っています。 藤田佳代

「道」に出演できませんでした。本番まであと10日もないというある日、ジャンプの着地ミスで右足首骨折し、靭帯を断裂しました。「ゴキッ」と音がした瞬間、「あーこんな人生もあるんやなあ」と出演をあきらめました。ギブスを巻かれ情けない姿になりましたが、幸いなことに歩き回ることができました。出演できなくなったのですることが何もなくなりました。自分の存在も儂くなってきたようにも錯覚します。これはいかん、と怪我後もすべてのリハーサルに参加しました。初めは仲間が元気に踊る姿を暗く見つめていましたが、それでもしつこく見続ける内に、がむ

しゃらに踊っていた最中には認識できていなかったことが目に入るようになりました。それは顔の角度、手の高さ、微妙なタイミング、立ち位置などのひとつひとつにとっても重要な意味があるということ、そのひとつひとつの重なりが作品を創り上げていくということです。たった一人のひとつの心の欠落やミスが作品を根元から壊しかねないという怖さを 離れて初めて知りました。作品はたくさんの動きや意味を含んだ作者の振付によって成り立っていますが、群舞にはさらに細かな注意が必要です。ちょっとしたお手伝いなら私にもできるかもしれないな、ふとそう思いました。踊れないならせめて踊りにかかわらせてもらおう、と。

今回は出演者 40 人を越える大作です。タイミングや立ち位置などの不都合は多々出てきました。作者である佳代先生の意図も考えながら、ダンサーが居心地よく踊れる場所を確保したり、袖でタイミングを声かけしてみたり。振付は把握しているので、必要なと思う時はギブスの足でゴトゴトと上手から下手へ走ったりもしました。

本番は大成功でした！ダンサーの気持ちがかピタッと重なる時が何回かあって、その瞬間にはまるで照明が明るくなったのかな と思うほど強い光が発せられるのです。私はもう一度あの光が見てみたいと思いますが、やはりダンサーとして踊りたいという気持ちに勝るものはありません。人間万事が塞翁が馬。人間、何が幸いするかわかりません。この足の怪我、それによって回って来たミストレス(振付助手)的な役割が自分の血や肉になってくれることを祈ります。

自称ミストレスは今後の舞台づくりに下記のようなことを仲間のダンサーに提案したいと思います。

・練習量は多い方がいい ・立ち位置、タイミングなどはかなり初期の段階から話し合ってもいいと思う ・衣装は何回も着て踊るほうが着慣れていいかも。どれも当たり前なことなんですけどね！

かじのり子

『道』では、何から何までお世話になりました。ありがとうございます。外の人間で一緒にさせていただくのが私一人でしたので、とにかく皆様の空気を壊さないようにと心がけてリハーサルにのぞみました。皆様に暖かく迎えていただいて過ごした、緊張しながらも楽しい時間… 毎回レッスン場のドアの前で、入ってもいいのだろうかとしばしためらった事、列で歩きながら、息をつめて皆様の呼吸のありかを探っていた事など懐かしく思い出されます。出演させていただいた事、とても感謝しています。本当にありがとうございました。

仮屋妙子

スタジオ公演 DANCE BOUQUET

8月26日(日) 研究所スタジオ

ダンスブーケが今のようなかたちで始まって7年になります。ある意味一番緊張する公演です。ふだんの公演なら佳代先生のOK も出ているし、リハーサルも重ねているし、化粧も衣装も照明もあるし、なんといっても舞台の上です。たくさんの付加価値をつけて踊ることができます。それにくらべるとダンスブーケは、誰にも見せていないし、リハーサル回数は少ないし(始まった頃なんてその日の朝創りました、ということもあった)、衣装も化粧もないし、スタジオの平場でターンを失敗しようものならお客様にあたってしまう…ような過酷な環境です。そんな公演なのですが、それがいいよと言ってくれる方もいたりして、ダンスブーケは今後も続いていくのだと思います。もうひとつ。過酷なのはダンスブーケの実施時期が8月の最終日曜だということです。蒸し風呂のようなスタジオの中、ダンサーの汗が飛び散る中、観に来てくださる方がいるのはありがたいことだなあ、とつくづく思っています。

今回、初めてスタジオ公演を拝見しました。通常の舞台と違いとても近くで見学でき臨場感がありました。普段の練習風景や、演者の各々の考え方も聞け舞台とは、また違った楽しみ方が出来ました。完成前を見ると完成後がどうなるのかが楽しみで次回の公演への期待も膨らみ楽しみが倍増しました。

砥石 和久

『風』 作舞 金沢景子

いま頬を撫でたそよ風から、服や髪を巻き上げる疾風から、そしていつもわたしの背中を押して歩みを促すあの風からも懐かしい手触りを感じる。

『空の上から』 作舞 仲間くみ子

天から放たれたエネルギーは、地に実りをもたらす生命を連鎖させる。

『コピー』 作舞 かじのり子

複製とは蓄積の証なのか。それとも、誰かの模造に過ぎないのか。確かなのはそこに思い悩む「わたし」が存在しているということ。

『砂漠』 作舞 西津華世

流動し変化(へんげ)するザラリとした粒の質感。この後どのように続いていくのだろう。

『cuddle me』 作舞 菊本千永

厳しく突き詰めていくストイックなカタチの中に垣間見せる、やわらかな心

『いばら』 作舞 長谷川千夏

積み重ねてきたモチーフたちが溢れだし、一歩また一歩と突き動かす。

『ハスミ in Autumn』 作舞 藤田佳代 踊 安田蓮美

指先が千枚もの枯れ葉を出現させる瞬間を確かみにみた。葉は散ることで次の年へと花の命を繋ぐ。

『熱い草原』 作舞 寺井美津子

草原では、雨以外にも滋養を運んでくる「空気」の流れが存在している。

『フェジーバード』 構成・振付 向井華奈子 振付 長谷川千夏 踊 仲間くみ子 長谷川千夏 西津華世 西田梨緒 姜未喜 藤原くるみ

この鳥たちは歌う喜びを享受する庭園に住まう。鳥は、年齢を経て歌う鳥に為るのではない。生まれたときからすでに歌う喜びを秘めている。

衣川佳子